

「キティホーク甲板上 友へ」

三戸 雅史

「アメリカに行つて漁師になるんだ」

「俺と一緒に英語の追試を受けている奴が、

何を言つてるんだ」

「ああ、笑つて送り出した。」

「おまえは確かに海上にいた。だが、乗つて

いるのは、漁船ではなく、アメリカ海軍の空

母。場所はペルシヤ湾。」

「私の知らないあいだに、何が起こつたのだ。」

「新聞に目を通したとき、はじめは気付かな

かつた。教えた大学入試の合格発表を新聞で確

認したとき、同じ学部、同じ学科に同じ苗字

が二つ並んでいた。それから五年間、おまえ

の勉強ぶりや生活態度は、実家に帰るたびに

親に伝えた。両親とも、自分の息子と同じく

らしい親近感を持つて聞いてくれた。五年たつ

ても卒業できない。私たちが、辛抱強く励まし

てくれた。おまえが大学をやめた一年後、私

は卒業し、実家に帰つた。

「そのおまえが、新聞に載つていうと、信じられ

ない。思いで記事を見た。野球部出身のがっしり

した写真が載つていた。野球部出身のがっしり

した体つきと人なつこい丸顔は、あのころと

変わらない。だが、気味が悪いほど剃りあげたスキンヘッドが、一瞬、別人かと思わせた。ホークの甲板上で裏方として働いているらしい。整備の内容は、F14戦闘機トムキャットに父が私に確認した。間違いない。久しぶりに我が家の食卓でのぼったおまえの話が、戦場から発信されたものとは、残念だった。広がつた。何かしなくてはと思った。おまえは言う。確かに、あのときの衝撃は相当なものがあったと思う。他国に住む者には想像もできないくらい激しかった。アメリカにいた者でないところはないだろう。アメリカにいた者でない。そうおまえは軍隊に入った。船と飛行機が好きだったおまえは、試験で優秀な成績をあげ、その頃はまだ日本にいた空母キティホークを選んだ。戦場にいる今は、アメリカがすべて正しいとは思わない。と言いながら、戦闘に参加している。矛盾を感じているようにもあるが、飛行機が故障もなく飛んで爆弾が命中するようにするのが自分の役目と割り切っているようにもある。おまえは割り切れるかもしれない。だが私には、わかれないことがある。だが私直結したのか。大学時代から、思いついたこ

とはやってみなければ気がすまないやつだった。あの頃は、間違いなくそれは美德だった。しかし、今回は他に選択肢はなかったのか。あのテロが日本で起こっていれば、日本にいても同じ発想をしたのだからか。いや、私は自衛隊に入ろうとは思わない。入れるとも思わないが、自分から近づくとも思えない。アメリカと日本では、軍隊に対する距離が違うのだろうか。普通、日本では自衛隊の制服を街で見かけることはほとんどない。自衛隊は、けっして身近な存在ではない。アメリカ力では、気軽に入隊できてしまうのだろうか。日本から出たことのない私には、想像もできない。

おまえは冷めた目で見ているが、アメリカの正義を信じて疑わない兵士が多いと、別の新聞には書いてあった。勝利を手にした今は、喜びに満たされているのだろうか。人殺しの味を覚えてしまったのだろうか。短い記事から短絡的に責めるつもりはない。だが、裏方だからと察することはない。だが、裏方と違って、戦争に参加する貢献度が下がるわけではない。人殺しに加担するという罪の深さも変わらない。人を傷つけないと思ってる人はいない。と、おまえは言う。常識的な発言だろうか。しかし、戦争自体が非常識な行為なのだ。正直言つて、今なんと言葉を掛けたらいいのか、自分でもわからない。おまえに何が起

こつたのか、直接聞かなくてはならない。それをしないうちに、一方的に非難することだ。けはしたくない。とにかく、顔を見ながら話したい。そのため、早く生きて帰ってほしい。そのでも、早く帰れということ、さっさとみんな殺してしまえ」ということにもなるのだらうか。

終わり